地域からの世界史—5

南アジア

辛島 昇

朝日新聞社

地域からの世界史—5

南アジア

辛島 昇

辛島 昇 からしま・のぼる
1933年生まれ。南アジア史
東京大学文学部教授
著書 『インドの顔』(共著、河出文庫)、『インド入門』、(編著、東京大学出版会)、『インド世界の歴史像』(編著、山川出版社)、*South Indian History and Society* (Oxford University Press) ほか

地域からの世界史 第5巻 南アジア

1992年4月20日 第1刷

著　　者　辛島　昇
発 行 者　及川武宣
印刷・製本　凸版印刷
発 行 所　朝日新聞社
〒104—11 東京都中央区築地5—3—2
電話 03-3545-0131(代表) 振替 東京0-1730
編集＝歴史・美術編集室 販売＝出版販売部

©Noboru Karashima 1992 Printed in Japan
ISBN 4-02-258500-5
定価はカバーに表示してあります

地域からの世界史　第5巻　南アジア

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

はじめに

南アジア（インド）の歴史くらい魅力に満ちたものはないように思う。もちろん、どこの地域にしても、どこの国にしても、歴史の大切さは同じであり、そこに住んでいる人びとにとって、歴史は重い意味のあるものに違いない。しかし、通史を書いたときに、比較的単調な歴史というものもある。

それに比べると、南アジアの歴史はダイナミックな躍動にあふれている。紀元前のはるか昔から、民族につぐ民族の来住があり、カスピ海沿岸を通ってやってきたインド・ヨーロッパ語族のアーリヤ民族も、インドの大地で他の先住諸民族と混じりあい、言語系統を異にする彼らの文化に深く影響され、そこから新しい社会と文化の創造がなされたのであった。インドといえば誰でもがすぐ思いうかべる「カースト制度」は、その諸民族の重なりが織りなした統合の形であり、異なった文化の相剋（そうこく）の中から生まれてきたヒンドゥー教と仏教は、東南アジア・中央アジア・東アジアへと伝えられ、その地に大きな影響を与えながら、南アジアとそれらの地

域とを結びつける役割を果たしている。

南アジア史のそのようなダイナミズムは、決して古代にだけ見られたわけではなく、一三世紀にはイスラーム教がもたらされて、インドの社会に、それまでにはなかった類の大きな影響を及ぼした。ムガル皇帝シャー・ジャハーンが愛妃のために建てた白大理石のタージ・マハルは、それ自体は宮廷文化の華にすぎないとしても、ムスリム支配がインド社会にもたらした文化的影響を、華麗に表現している。

この新しい文化の華が開いたムガル帝国の時代は、同時にまたヨーロッパ人の東方進出の時代であり、その結果一八世紀になると、南アジアの各地はイギリスの植民地として支配されることとなった。南アジアはイギリスが世界の経済を動かすための、梃子にさせられたのであった。それを跳ねのけて、自由をとりもどすためには、一九世紀中葉の大反乱と二〇世紀におけるガンディーの非暴力闘争を経なければならなかった。もちろん、独立が達成されるには、第二次世界大戦という世界的規模での帝国主義との戦いが必要であったのであるが。

本書では、このような南アジアの歴史のもつダイナミックな流れを明らかにすることを第一にこころがけた。しかし、この歴史とすればまことに魅力に満ちたダイナミズムも、立場をずらして見るならば、その中で変転していく社会に生きた人びとにとっては、大きな苦しみであったに違いない。さらにまた、現在の南アジア各地で起きている宗教対立、あるいは民族紛争

は、そのような大きな歴史のうねりの中で生みだされた鬼子であるともいいうる。したがって本書は、単に傍観者の立場から歴史のダイナミズムを描くのではなく、現在の南アジアの人びとと我々との間に接点を求め、その立場から歴史を感じとることに努めている。

そもそも本書は、二十六巻に上った週刊朝日百科『世界の歴史』の展望編に三年にわたって書き続けた「南アジア」の部分を一冊にまとめたものである。その構成は、年代ごとに世界の有り様を見るという目的から、世紀を単位に巻立てがなされていた。本書でも、巻を章としながらも、その構成はかわることなく踏襲されている。したがって、一般の歴史書の叙述の仕方とは、多少違っているかもしれない。しかし、先に述べた歴史のダイナミズムを理解するための配慮は、章の中でも種々の形でしたつもりである。さらに本書では、新たに序章を設けて、南アジアの歴史の大きな流れを、節々の問題点とともに記しておいた。

ここで南アジアの範囲について一言しておくと、一九八五年、バングラデシュのダッカで南アジア地域協力連合（SAARC）という国際機関が設立された。その構成メンバーは、インド、パキスタン、ネパール、ブータン、バングラデシュ、スリランカ、モルディヴ、の七か国であり、したがって、現代政治との連関でいうなら、この七か国の占める領域が、南アジアの範囲ということになる。しかし、歴史的にいうなら、常に西北から侵入する民族の通り道となったアフガニスタンは、南アジアの歴史と切り離しえない地域である。したがって本書では、その

地をも加えて記述している。

ただ、本書の中で、それらの地域がすべて同じ密度で扱われるかといえば、当然ながらそうではない。叙述の中心はあくまで強力な政治権力を生み出した北インドの平野部と南インドの半島部であって、ネパール、ブータンといった地域は折にふれて言及されるにすぎず、スリランカもまた同様である。それらの地域についての知識は、巻末のビブリオグラフィー（参考文献案内）に掲げた専著によって、適宜補っていただきたい。なお、本書における「南アジア」と「インド」の使い分けは必ずしも厳密でない。独立後の時期における「インド」は「インド共和国」を意味しているが、それ以前については、「南アジア」というべきところを、慣例にしたがって、「インド」と表現している場合も少なくない。

時代区分についても一言しておくと、これは大変に難しい問題である。古代、中世、近代、現代といった時代の分け方自体が、そもそも便宜的なものであって、いろいろな区分が可能である。インド史についていえば、ヒンドゥー王朝支配期を古代、イスラーム王朝支配期を中世、イギリスの支配期を近代、そして独立後を現代とするような区分法がしばしば見られるが、これはきわめて便宜的なものにすぎない。それとは別個に、マルクス主義的な社会の発展段階論を適用する例も見られるが、これにも問題が多い。序章で述べるように、インドの古代に奴隷制の発達を見出すことは困難であり、封建制の存在についてもすべての研究者が認めるわけで

はなく、その開始時期についても、地域によって異なっている可能性が大きい。資本主義経済の発達以前を前近代、それ以後を近代とし、前近代と近代の二分法で考える研究者も少なくない。

本書では、きわめて大雑把なとらえ方であるが、一つの試みとして、北インドについてはグプタ朝を古代的社会秩序の完成した時期と考え、新しい地方文化の成立する一〇世紀前後を、中世的社会秩序の成立した時期として扱う。南インドについては、チョーラ朝とヴィジャヤナガル王国との間に、その転換点があったとする。近代の始まりは、「大反乱」を経て、イギリスの植民地行政が確立し、インド人の間にも新しい改革への動きが出てくる一九世紀末葉とするのが、妥当であろうかと考えている。

なお、週刊百科として書いていた時には、二〇世紀に入ってからは十分な枚数の確保が難しく、いきおい記述をはしょらざるをえなかった。今回は新たに筆を加えて、その欠を補っている。その他の章についても、幾分か記述を改め、不注意の誤りを正した点がある。その見直しの作業に際しては、山崎元一、粟屋利江両氏から貴重な助言を頂戴した。年表もまた粟屋氏の手をわずらわせた。なお、週刊百科執筆に際しても、多くの方の御助言を頂戴したが、とくに地名、人名の読み方について、坂田貞二、三浦徹両氏の御教示を得た。ここに記して深く感謝したい。

本書によって、これまで我国においては比較的遠くに置かれてきた南アジアの世界を、多少なりとも身近なものとかんじていただければ幸せである。

一九九一年一二月一〇日

辛島　昇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

はじめに

序章　南アジア史の流れ　13

インダス都市の繁栄　紀元前(1)　20

アーリヤ人の来住と新文明の展開　紀元前(2)　28

マウリヤ朝の繁栄　紀元前(3)　38

クシャーナ朝支配と国際商業　一—二世紀　48

ヒンドゥー教的秩序の形成　三—四世紀　55

グプタ朝の支配と古典文化の完成　五—六世紀　64

ハルシャの帝国と小国分立　七―八世紀　73
王朝の転変とタントリズム　九―一〇世紀　82
ガズナ朝の侵入とチョーラ朝の発展　一一世紀　88
めまぐるしい王朝交代劇　一二世紀　95
ムスリムのインド支配　一三世紀　102
デリー・スルタン朝の地方攻略　一四世紀　109
イスラーム教の浸透　一五世紀　115
ムガル朝とヴィジャヤナガル王国　一六世紀(1)　122
アクバル大帝の支配　一六世紀(2)　133
ムガル朝の繁栄　一七世紀(1)　141
ムガル朝最後の栄光　一七世紀(2)　149
帝国の瓦解　一八世紀(1)　157
イギリスのインド支配始まる　一八世紀(2)　163
イギリスによる支配と収奪　一八世紀(3)　172

進むイギリスのインド統治　一九世紀(1)　181
イギリス支配を揺るがす大反乱　一九世紀(2)　188
知識人階層の成長　一九世紀(3)　196
ガンディーの登場　二〇世紀(1)　204
インド、パキスタンの分離独立　二〇世紀(2)　212
噴出する植民地支配からの矛盾　二〇世紀(3)　221
年表　248
文献案内　255
索引　271

装幀／多田　進・板谷成雄
地図・版下／梟社・吉沢スタジオ

序章　南アジア史の流れ

インド文化形成に大きな役割を果たしたインド・アーリヤ民族の侵入は、紀元前一五〇〇年頃のこととされている。ドラヴィダ民族を含むいくつかの民族はそれ以前にすでに南アジアの地に来住し、インダス川流域には高度な都市文明が築かれていた。インド・アーリヤ民族はそれら先住民族を支配する形でガンジス・ジャムナー平原に進出した。初めはパンジャーブの地にとどまっていたが、紀元前一〇〇〇年頃に東進して、先住民族と混じりあい、ガンジス川中・下流域に豊かな農耕社会を出現させた。鉄器の使用、国家の形成、バラモン教の発展、カースト制度の原形の成立など、きわめて重要なできごとが彼らの東進から紀元前五〇〇年頃までの時期に起こっている。

その時期の終わり近くには、さらに仏教、ジャイナ教がバラモン教に対抗する新しい宗教として起こり、バラモン教自体も、先住民族のもっていたいろいろのアイデアをとりいれて、ヒンドゥー教へと変身していく動きを見せ始めた。先住民たちはシュードラとしてアーリヤ人に

隷属させられながらも、紀元前五〇〇年以降の時期には、農業生産の進展とともに農民として身分が上昇する。それと同時に、バラモン（司祭）、クシャトリヤ（王族）、ヴァイシャ（商人）、シュードラ（農民）という四つのカースト（ヴァルナ）の下に、卑賤とされる労働に従事する部族民が、賤民層として固定されてくる。なお、ダーサと呼ばれる奴隷の存在も知られるが、ギリシア・ローマにおけるような奴隷制の展開は見られなかった。

国家の発展という点から見るならば、紀元前四世紀に成立したマガダ国のマウリヤ朝は、ペルシアの影響を受けたインド最初の中央集権国家として重要性をもつ。そのアショーカ王は、仏教に帰依し、ダルマに基づく統治を行ったことで名高い。この時代、商業も国際的規模で展開されていた。紀元前一世紀の頃からは、再び西北方からの諸民族の侵入を見る。紀元前後の時期には、『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』のようなヒンドゥー教信仰の中心と関わる長編叙事詩や、『マヌ法典』のようなヒンドゥー教徒の生活を律する法典類が成立している。仏教はいまだ重要性を保っていたが、ヒンドゥー教が、社会の中で大きな力をもつようになってきたのである。紀元一―三世紀の頃には、西はローマ帝国、東は東南アジアとの貿易が活発に行われ、南インドでも、国家の姿が明らかになり、ドラヴィダ系タミル語古典文学も成立する。

四世紀のグプタ朝の時代は、そのような古代社会が成熟し、古典文化の華が開いた時代であった。グプタ朝の下で形成されたヒンドゥー教的社会秩序は、多少の変革を経ながらも、今日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c